ふるさとだより

月刊 第 518 号

寺泊に生まれてよかった 近くても、遠くても、永生きしなされや

（敬老の月のコトバ）

あちこちの老健施設にたのまれお話に歩きます。

寺泊では、桐原の里があります講堂にあつまる老人のほとんどが車イスできなさる。

足がきかなくなって不自由な老人のところへ車で走ってゆける老人のしあわせをしみじみ感じます。

自分の足で歩けるしあわせを当り前と思ったら、バチがあたると思いました。

九月七日に寺泊浜に伊能ウォーク百七十人が、雨の中を歩いて到着しました。

東京から新潟まで三千八百キロを歩いて、二年ガカリで、日本一周する「アルキ隊」です。

七日の出発は、浜づたいの間瀬から、弥彦山のウラ道、シーサイドラインを二十九キロ歩いて寺泊一泊。

八日も雨でしたが、寺泊の人も参加して、出雲崎まで、海沿いの道を二百七人が雨の中を行進しました。行列は百メートル以上。高橋誠寺泊町長さんも参加されました。

新聞に出ていた感想談は、次の通りです。

「壮大な旅を続ける伊能ウォーク隊と一緒に歩いて、今日は、いい思い出になる一日でした」

ゴール地点では、寺泊町のサービスで、浜料理十八番の「番屋汁」がふるまわれ、一行は足のつかれをわすれて大喜び。

なにしろ、直径一メートルの大ナベに、カニ、タイ、サケをぶちこんで、二百七人のハラの中をシンからあたためた。

全都道府県約一万キロを歩き通す人々の平均年齢は、六十才を超えているが、雨の中見ていると、足どりがすごく活発だった。

江戸時代のおわりごろ、日本中を歩いて、日本始めての地図を作った伊能忠敬の徳をたたえて「伊能ウォーク」が始まった。

地理学者で、測量家の「いのうただたか」も、よろこんで行列の中に生きていることだろう。

二〇〇一年の正月まで、歩き続ける予定だという。

今月は、敬老と足の月。それに「名月のツキ」で晶もある。

満月のゆうべ、雨でさえなけりゃ、名月を仰ぎながらの盃の味は九月ならではの楽しみ。

十二日の日曜日には、寺泊地区の敬老会がひらかれた七十才以上が、大体浜ぐらしの老人八百四十人がまねかれ、至れりつくせりのサービスをうけた。

さいわい晴天で、それに暑くなかったので、老人の出あしがよかった。

日本国中、どこでも敬老会がひらかれるありがたい世の中になった。老人天国・老人浄土。

ところが老人になったことをよろこんで生きている人が案外すくないように思われる。

どこでも、ひとりぐらしが多くなったことや、子や孫と心のゆきが活発でなくなったせいもあろうか。

県下八十あまりの海水浴場があるが、平成十一年度、一番海水浴客のきた寺泊中央海水浴場はここだ。七、八月で四十三万人がここでおよいだ。
九月となると、人影は、ほとんどない。この幼女が母につれられて散歩している程度。
でも、十九日の魚まつりでは、その砂の中に、タイやサケなどの魚のフダがかくされ、群集が夢中で砂をかきまわして、フダとりで、ゴッタ返す。これから来年の夏まで、ここは冬眠に入る。

ここは、寺泊水族博物館前。
ひどい雨の中を、伊能ウォークの歩きが出雲崎めがけて始まる。寺泊からも、町長さん始め出雲崎まで参加して、総勢二百七人の大行進である。
むかしから足から先アガルといわれる。車社会で足が弱くなった。足のよわい人は、永生きできないときく。歩く訓練に、この種のウォークが流行。
良寛ウォークは、島崎から岡山の円通寺まで歩く。良寛さまは、足が強かった。

人間はどっちみち、一人の存在だ。

自分が老人々生をよろこぶ責任者なんだから、よろこべるタネを若いときからしこんできたはずだ。

そこで、今月の便りで、寺泊人で地方の小説家の作品を、参考までに、その一部を紹介したい。新潟県民芸術祭文芸部門で、入選された寺泊町野積在住の矢野一さんの作品である。

小説

一人暮らしの日々

入梅にはまだ入っていないはずなのに、今年は雨ばかり降っている。

硝子窓から外を見ていると、樋が詰っているらしく、雨があふれている。

気温も五・六度位、上がり下がりして、体調を保つにその都度下着を重ね着してみたり、脱いだりしている。今年は、どうも異常気象のようだ。

風間祐助・七十二才、一人暮しである。

電話が鳴った。受話器を取る。

「今何をしている？退屈で身体を持て余している。遊びに来てもらえないか」五歳年上の中村だった。

農家のおじいちゃんである。老夫婦、倅夫婦、孫二人。

風間の一人暮しの老人からくらべると、うらやましい家族構成である。

「今ちょっと風邪気味でね。この所体調が思わしくないんだ」風間は答えた。

「そうか。それじゃしょうがないね。君は寝ているのか？」

「寝ている程の風邪でないんだが、体がだるくてしょうがない。この間医者から診てもらってさ、血を採ったり、尿検査もした。異状ないそうだ。心臓の不整脈だけは十年来の病気だから、これはまあしょうがない。そっとして、薬を飲んでいるだけだ」

「そうか。まあ大事にしな。そのうち雨でも晴れると、そちらへ寄せてもらうから」電話を切ると、玄関の戸が開いた。と同時にチャイムが鳴った。

二人連れの三十歳前後の女性達がこの所、月一回位の割で尋ねてくる。

〇〇〇〇教の教えを説いて廻っているようである。

この間の時は一冊の薄い本を置いて行った。

「この間の本は読んで下さいましたか？」

「いや、まだなんです。ぼんくら頭には読んでも、意味がのみこめないんですよ。もうこんな老人は相手にせずに、よその家へ廻って下さいよ。もうろくしているんですから」

「そんな風には見受けられませんが……」

「大体ね。字が見えないんですよ。それに読む気力がなくなってね」

風間は女達二人を追い返した。

世の中にはこんな事をして生活している人も居るのかと思った。或いはボランティアで奉仕活動なのかもしれない。

かつて風間も人様にすすめられるままに、良寛会に入り、赤旗を読み、〇〇会、これは亡くなった母が入会したものだった。寝たきりになった母の所へ、〇〇会員がつめ寄り、この会に入ると病気がすぐ治るからと勧められて入ったものだった。

母亡き後も〇〇新聞と毎月の雑誌は届けられ、何がしかの会費を払い続けている。

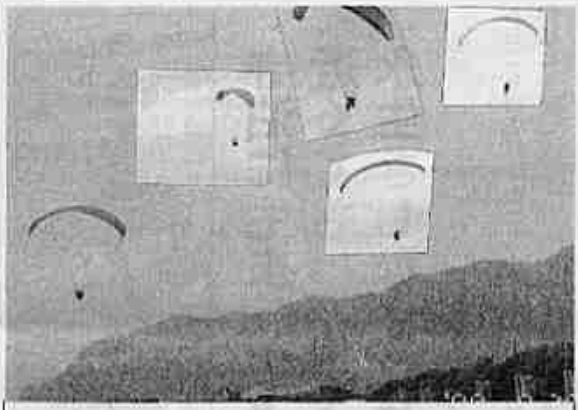
親が入ったものは、親亡き後は子が引き継ぐものと〇〇会員から諭された。

農協から借入金をした時、農業新聞の講読をすすめられ、それもまた、つき合いの一つだからと応じたら、翌日もう一つの農業新聞があるから、ついでにどうだと迫られた。

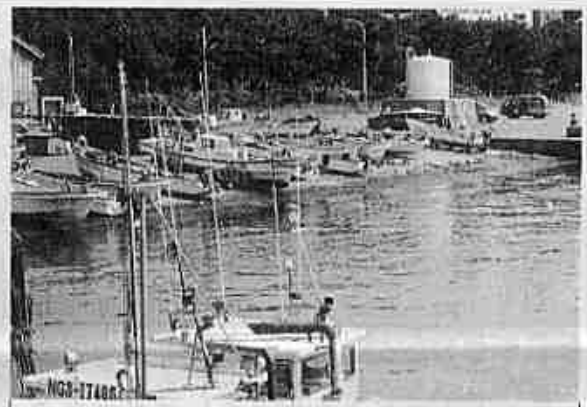
さすがにこの時は一紙でたくさんとことわった。

三年位前から村の女同級生が或る会をしつこくさそっているが、もうこの年だからと丁寧にことわっている。

良寛会も年だからと脱会し、赤旗もやめた。農業新聞も五年位



八月の末から、九月にかけて、セナカにエンジンをせおって空に舞い上がるパラグライダーの若人が次々とけたたましいヒビキを流しながら、坂井町鷲町のウラ浜から飛び立つ。高所恐怖症の人なら見ているだけでも、トリハダのたつ命がけの遊楽。しかし、まだ一人もおちた者はいない。むこうの弥彦山からパングライダーが野積の裏山におちて、春一人死んだ。
大空に色とりどりのカサさした感じ。落ちないように舞ってくれ。



むかしからの漁師マチてらどまりの面目は、やっぱり漁船の列だ。目下、舟はヒル寝している時間だ。やがてボツボツ操業開始。漁師の人数がすくなくなって浜にでても少々さびしい。夕方になって、魚のセリが始まるころが一番みていてたのしい。むかしは、黒山の人だかりだった。あのどなり合うような漁師の口のきき方が風化した感じで、セられる魚たちも張り合いがないだろう。

でやめ、すべて身軽になっている。女達を追い返したのも、今また○○○○教にのめり込むと自分を見失うことになりはしまいかと思ったからだ。

風間は自分のことをお人好しだと思っている。

人にすすめられると、すぐ乗ってしまう。ことわることをしない。

この年になって、ようやくことわる事を身につけたようだ。

翌日雨が晴れた。

中村が午後早速バイクでやって来た。玉ねぎを十個ぐらい袋に入れて持って来た。

実は風間の所にも少し玉ねぎを植えて収穫してあるが、下さるものは有難く頂戴した。

中村は部屋に上ると吐き出すように言った。

「家の中で俺は疎外されているんだ。長男は返事をしないし、嫁もろくに口をきかない。俺のカカアまでが孫の子守でうつつをぬかしていやがって……」

半分怒って、半分しょげかえっている。

（続）

備考　この文章の中で、宗教名は伏せ字といたしました。御諒察下さい。

太平洋戦争が終ってから寺泊婦人会が主催して永い間、敬老会がいとなまれた。近年になって婦人会がなくなってから、町の福祉協議会が主催して、敬老会がひらかれる。出ない人にも人並みの御ちそうがとどけられるが、七十才以上、浜だけで八百四十人。今一同が乾杯するところ。このあと多彩なアトラクションで老人みな大満足。午前中の高橋町長さんは、千日修行の比叡山の高僧の話、講演は、国上山の木宜院住職の「足ることを知る」のやわらかくユーモアの話。

経費御協力

（敬称略・順不同）

東京都　山田　武男　金壱万円
〃　酢谷　進　金五千円
東京都　竹田　秀雄　金五千円
〃　外山　勝志　金五千円
〃　樋口　金一　金五千円
〃　山田　ナミ　金五千円
〃　丸山　静枝　金五千円
〃　金沢　平八　金三千円
〃　高橋　啓子　金三千円
〃　納谷　トヨ　金三千円
〃　阿部　正行　金三千円
〃　石野　セツ　金三千円
海老名市　朝霞市　藤田　伝治　金三千円
大和市　阿部　貞子　金五千円
〃　前田　昭　金三千円
小金井市　高野　貞夫　金五千円
立川市　山田　幸彦　金三千円
習志野市　徳久　裕　金五千円
上尾市　松井　繁男　金五千円
横田市　上林　金一郎　金五千円
高槻市　藤田　摩利子　金三千円
札幌市　外山　雅章　金五千円
茅ヶ崎市　家老　淳子　金三千円
藤沢市　外山　勘次郎　金五千円
〃　丸山　悦　金三千円
国立市　高橋　汎　金三千円
墨田区　笠原　彰　金三千円
札幌市　外山　雅章　金五千円
宝塚市　田上　嘉明　金壱万円
三鷹市　田中　ヨシ　金三千円
福井市　矢部　規行　金三千円
海老名市　山岡　ムツ　金三千円
〃　力石　賢一　金三千円
函館市　二見　晴義　金五千円
船橋市　清水　巴　金五千円
川崎市　武沢　寛　金五千円
高槻市　藤田摩利子　金三千円
小平市　小林　秀雄　金三千円
相模原市　関野　秀次　金五千円
西宮市　納谷美智子　金五千円
松戸市　中村ヤヨヒ　金五千円
新潟市　佐藤　弘　金五千円
〃　佐野　賢二　金五千円
黒埼町　山谷　政治　金三千円
新潟市　大越　律子　金五千円
〃　小林　キミ　金三千円
〃　横下　忠男　金三千円
〃　外山　和　金三千円
〃　平井英次郎　金三千円
〃　白井　彰英　金三千円
〃　勝本　冨美　金三千円
〃　勝本　三枝　金三千円
与板町　小熊　千恵　金三千円
吉田町　泉谷　善二　金五千円
〃　内藤　マツ　金三千円
出雲崎町　旭　茂　金三千円
名立町　細谷ヤチヨ　金三千円
見附市　山岡　トヨ　金三千円
亀田町　伏見　弥生　金三千円
長岡市　浄願寺　金壱万円
〃　前田　保郎　金五千円
〃　佐藤敬之助　金五千円
〃　住川　健　金三千円
寺泊竹森　本田半四郎　金五千円
〃　海田　小黒三喜治　金三千円
〃　上桜町　円福寺　金五千円
〃　竹森　竹内　武治　金三千円
〃　金山　講口美津枝　金三千円
〃　松浜町　小町　松栄　金五千円
〃　大町　平石アキノ　金三千円
〃　野積　橋本　敬　金三千円
〃　野積　渡辺　哲夫　金三千円
〃　上田町　丸山　イネ　金三千円
新潟市　竹内　チヨ　金五千円
〃　藤田　功　金三千円

今では、タンボのイネをかけるハザの木は、日本国中から姿を消したが、寺泊には、あの通りまだ残っている。むこうが寺泊浜。ここは吉・部落・長岡ゆき県道。コシヒカリが腰をおとして、カリコミを待っている。

ことしの出来は、七・八月の暑さ日でりのおかげで農家は、浜の海水浴とおんなじによかった、よかった。でも、仲々人間は「ヨカッタヨカッタ」とすなおにいいない生き物だけど。

寺泊上町	宮村　利郎	金三千円
〃	野村　栄一	金三千円
〃荒町	渡辺　美隆	金三千円
〃	五十嵐金十郎	金三千円
〃	中野　宏	金三千円
〃下荒町	山田　宏	金三千円
〃大町	宮川　ヒデ	金三千円
〃	石川　正雄	金三千円
〃白岩	大平　美枝	金三千円
〃	杉田　タカ	金三千円

備考
前号で御知らせした故柳下キイ様の御寄附金拾万円は、ふるさとだより基金とする報告がございました。
やがて創刊五十年が五年後にまいりますので、記念会を開くときの費用として「基金」に入れました。ありがとうございました。
なお、御後援のおしらせは、中村さん受納分は、中村さんの便り、窪沢の受納分は、私の書く便りにおのせしますので、お知らせが、一、二ヶ月おくれることがございますので、御諒承下さいますよう。

寺泊町東南のタンボの真中に、近年出来たお米のデパート。目下ドンドンお米が運ばれてくる。
ある農家の話。母親が死にかかっているけど、父ちゃんは、タンボで稲をとりあげ、母ちゃんがバイクで病人の死が近いと知らせにきて、あわててキカイにくりこんで病院にゆくと、まもなく息を引きとった。その間にも自動的に精米が続く。しあがったお米は、コシヒカリ。それをすぐたべた御飯は、オカズいらずの日本一ゼイタクな美食だった。

あとがき

暑すぎる夏が終りました。寺泊は、全国放送で、三十八度三分のトップの日には、アチコチから便りがありました。
平成五年の九月のふるさと便りは、「百日紅も白萩も咲かずに秋」の見出しでした。
平成五年の冷夏にくらべ、百日紅は、文字通り暑さのおかげで、百日もえ続けました。
どのお寺でも、百日紅の木があります。
フトリのおそい木です。百年の木は、ザラにあります。
この度の便りに入れて御目にかけた「サルスベリ」は、樹齢三百年と植木やが申しました。
かなり前に、賞産家が買いにきましたが、売りませんでした。
この木には、江戸時代末に生れた祖父を始め、代々木のぼりしました。
私は、枝にナワをかけてブランコして、ホッケおちた体験がございます。
自分と信仰でカカわりのある人々に、チラシを配った文句の一部を紹介します。
「燃えましょう。このサルスベリの花のように、このいのち。この木三百年生きて、今なお百日燃ゆる。秋ヒガン。感動がないと人間老いくちる。」
九月町の催しとして沢山ありますが、十二日の浜まわりの敬老会を皮きりに、寺泊町各学区の敬老会が十月中に開催されます。
十九日には、浜公園や中央海水浴場で、寺泊観光魚まつりが、毎年盛大に開かれ、県内各地から魚好きがあつまります。大番屋ジルは大好評。
浜の砂にかくれている魚の宝さがしで、ワクワクしたり、魚のせり市でドキドキしたり、青果のせり市で、ホクホクしたり、お酒利酒会の味くらべなど、町と観光協会主催の大ガカリの魚まつりです。
毎年数千人がおしよせ、車が寺泊浜をうめつくします。
新鮮な魚がいっぱいの寺泊屋台村開村と新聞に広告も出ました。
夏のてらどまりというけど、秋の寺泊もステキです。
前に御紹介した沢山の泊り宿がございます。
前に御知らせしたほかに、大町の枯笈庵も宿泊宿です。
（電話　七五―二〇七六）
野積浜の浦茶屋は、浦浜屋で、（電話　七五―三〇七二）した。
失礼しました。
なにかと「あやまり」があると思いますので、御きかせ下さい。
特に、誌代掲載の「オチ」があり勝ちです。
よろしくどうぞ。

日本国中で、メダカの絶滅危機が報道された。
メダカの生きられるような環境をつくろうと力々で声があがっている。
この池には、メダカが群をなして健在。鯉の群とも仲がよい。
池の水は底からわくドロ池。メダカ生存のヒノキ舞台。
水道の水は、全く入らない。あのツツジの花や葉がおちてメダカのエサになる。
この庭は、寺泊町文化財指定。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代祝共（百円）
編集人　一窪　沢　泰　忍
発行人　中　村　興　樹
発行所　新潟県寺泊町　ふるさとだより
郵便番号　九四〇―二五〇二
ダイヤル局番　〇二五八七五
電話　二〇二九番
振替番号〇〇六二〇―三―五七四五
印刷所　吉野印刷株式会社